

実践報告

佐賀星生学園の現在までと今後の課題

加藤雅世子・眞田英進

(佐賀星生学園・西九州大学子ども学部)

(平成26年1月9日受理)

Saga Hossho Gakuen's Up to Now and the Future Themes

Kayoko KATOU and Tsunenobu SANADA

(*Saga Hossho Gakuen · Department of Children's Studies*)

(Accepted January 9, 2014)

実践報告

佐賀星生学園の現在までと今後の課題

加藤雅世子・眞田英進

(佐賀星生学園・西九州大学子ども学部)

(平成26年1月9日受理)

Saga Hossho Gakuen's Up to Now and the Future Themes

Kayoko KATOU and Tsunenobu SANADA

(*Saga Hossho Gakuen · Department of Children's Studies*)

(Accepted January 9, 2014)

Key words : Saga Hossho Gakuen 佐賀星生学園

1. はじめに

学校になじみにくい、若しくは教室での授業場面に適応しにくい子ども達、いわゆる不登校や発達障害等の子ども達が中学校卒業以降の進路を考えると、県内においては専門的な見地から支援している後期中等教育機関の存在は皆無であった。

義務教育以降の後期中等教育の選択肢は今や多くの校種が存在するなか、対象生徒の教育ニーズが十分に満たされているとは言い難い。そこで、不登校及び発達障害の変遷を経て、現状の多様化する生徒のニーズに応える後期中等教育機関における教育現状の課題解決に向けて、高等専修学校「佐賀星生学園」(以下、学校)は、平成22年8月に学校法人認可を受け、その後、平成22年12月に学校設置認可を受けた。そして翌年の平成23年4月に開校した。

学校は中学時学校不適応の生徒、そして高等学校中退者を支援する後期中等教育機関であり、彼らが社会的に自立できるよう適切な教育的支援を行うこと、そして、教育を受ける生徒たちが「学校」という居場所の「意義」「意味」を見出せるような学校作りを行うことを設立の趣旨としている。

また、学校では、垣根のない環境がユニバーサルな精神を育むという教育理念を掲げており、子どもたちが、学校生活のなかで、互いに理解し認め合う、そして協働し合う方法を獲得することで、弾力のある人間性を育成する教育のユニバーサルデザイン化を目指している。

加えて、彼らの教育課程や授業における支援の内容・方法、卒業に向けた移行支援、進学または就職後の動向等、在学中だけでなく卒業後も含めた包括的支援を行う。学校は開校から3年目を迎え全学年が揃った。本報告はウィークデイコースの教育支援方法による生徒達の経過とその変化をまとめたものである。

2. 学校概要

(1) コース紹介

- ①週5日登校(月～金)ウィークデイコース
- ②週1日登校(土)ワンデイコース

(2) 在籍生徒数

①地区別

県内5つの地区及び県外の地区別在籍者数は表1

に示す通りである。

表1 在籍者地区別人数

地区	三神	佐城	杵西	藤津	東松	県外	合計
人数	22	44	23	7	7	3	106

(H25.11.1現在)

②学年別・コース別

学年別及びコース別の在籍者数は表2に示す通りである。

表2 在籍者学年・コース別人数

	1年	2年	3年	合計
ウィークデイ	27	20	31	78
ワンデイ	3	6	19	28
合計	30	26	50	106

(H25.11.1現在)

(3) 高等学校からの転校生

平成25年度在籍生徒の転校生の数は、ウィークデイコースで17%、ワンデイコースで40%である。

3. カリキュラムの特色

学校の入学対象生徒は、中学時に不登校を経験したものが90%の割合を占めている。そのため自宅から一人で外出することや電車に乗ることに対して大変不安を感じている。入学という新たなチャンスを生かしどのようにして継続させていくのが課題になってくる。

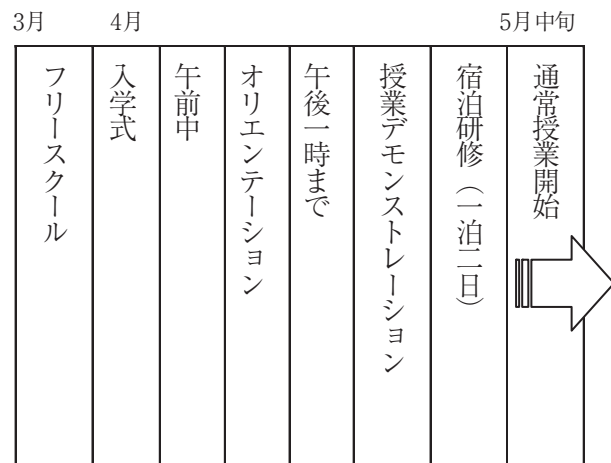


図1 入学から通常授業開始までの1ヶ月

学校に行っていない期間、一日の全てが自由な時間であったのが、入学後は時間に合わせて動かなければいけない。生徒達の多くは自分のペース配分を知らない。ゆえに、突然の環境の変化にとまどい、初日から頑張りすぎて息切れがおこり、また、引きこもるといったケースに陥る可能性もある。そのよ

うな問題をも考慮して、学校では、まず自分のペースを知ることから始める。入学後、最初の一週間は、自分の居場所を作ることから始める。学校での初期の居場所作りとは、言葉をあまり発することができなくても一つのことがやり遂げられる、棚作りなどの「もの作り」の作業から始まる。そして皆で協力して作り上げたという感覚を味わいながら、少しずつ距離を縮めていく。加えて情緒的なかわりを適切に行っていくことを実践している。最初の一週間は、生徒達が緊張していることもあり、午前中授業である。

第2週目は、昼食時間をつくり、学校で弁当を食べる体験をする。食べた後掃除をして下校する。この週は、学校で皆と弁当を食べる週である。そして、第2週目の最後に一泊二日の宿泊研修に出向く。自宅以外の場所で、家族以外の人とのかかわりを経験したことが少ない生徒達にとって、異空間体験は、大変な緊張と勇気が必要ではないかと思われる。

宿泊研修を体験し乗り越えて、第3週目、時間割が午後までになり、各科目の授業ガイダンスが始まる。

このように、少しずつ段階的に学校にいる時間を長くし、内容を濃くしていくカリキュラムを組んでいる。生徒達の多くは、休むということに劣等感を感じており、自分のペース配分がわからず頑張りすぎる子もいる。まずは、自分のペースをつかむことを念頭に置いて、「疲れたら休むのが当たり前」「いきなり学校行き始めたら、きついの当たり前」だということを生徒達に伝えている。

この入学後から、一ヶ月が最も重要な時期であり、以降の教育的支援が円滑に運ぶカギである。漸進的なカリキュラムにそって進んでいくことで、生徒が自分のペースをつかみつつ、学校という新たな場所に溶け込んでいけるよう支援している。

4. 教育支援の考え方

(1) 支援の考え方<その1>

従来の学校教育において実践されている問題解決アプローチは、以下の通りに行われている。

- ① 関係職員が、問題について観察、調査、情報交換、問題の性質等を査定する。
- ② どうしてそのような問題が起きてしまうのか、その子の問題は何なのか、保護者の関りに問題はないか等の「原因」を特定する。

③ 当該生徒の問題点を指摘し、その点を「改善」していく指導を行う。保護者にも問題点を伝える指導するように依頼する、といった指導方針を立てる。

④ 実行する。

この方法論でうまくいくこともある。その一方で一般に難しい事例と言われる場合には、この方法はうまくいかないことが多いのではないだろうか。問題が長く続くと、それを解決するには相当の努力が必要だと考えるのはごく自然なことである。学校の先生、スクールカウンセラー、保護者が何をやってもうまくいかない。同じ事を何度も繰り返して別の結果を期待することは意味をなさない。しかし、私たちは自然と同じ方法を繰り返してしまう。この方法では教師も保護者も疲弊していくことも考えられる。また、問題をその子の個人的な問題として取り扱い、その子を通常のクラスから外してしまうという方法においても、問題と切り離された解決を作っているにすぎない。

子ども達には生来学びたい、周りの人たちとうまくやっていきたいという生来の願望を持っている。何か変化につながる小さな違いを見つければ、大きな違いを生み出すことができる。生徒と教師との関係に小さな影響を与える工夫を見出すことが大切だ。学校で実践している教育は以下の通りに行われている。

- ① 生徒の問題行動や短所等を取り上げることをする代わりに、生徒の成功体験、強さ、長所に焦点をあてる。
- ② 教職員間で共通理解を図ると共に、生徒との関りを通してそれらを引き出していく。
- ③ 生徒自らがそれを自覚し活用できるように支援することを目指す。
- ④ 保護者にもうまくいっている部分に焦点を当てた相互の取り組みと情報交換を図っていく。

<従来の支援方法>

問題解決思考
(Problem Solving Thinking)

<本校の支援方法>

解決構築アプローチ
(Working on What Works)

図2 従来の支援方法と本校の支援方法

(2) 教育支援の考え方<その2>

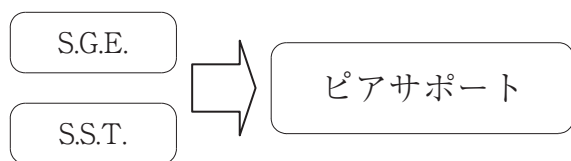


図3 SGE 及び SST からピアサポートへ

構成的グループエンカウンター（SGE: Structured Group Encounter）は本音の交流や親密な人間関係の形成を意味する。

また、自己理解・他者理解に基づく自己変容・自己成長をめざすものである。

ソーシャルスキルトレーニング（SST: Social Skill Training）は対人関係における技術の獲得をめざすものである。学校では年間を通し授業のなかで実践的に行っている。

この2つがピアサポートに繋がってくる。学校は1学年1クラスのため縦の関係に関しては授業のなかで関る時間が多いと言える。生徒達はあらゆる行事、授業を通して友達の力がいかに大きいかを感じることができていることが窺える。互いに認め合い、支えあうこと、補いあうことが生徒達の考える力、伝える力にも結びついている。学校では、主体は生徒達であるという、生徒中心という思想がベースにある。生徒が自ら考え創意・工夫をしながら問題に取り組む、仲間を作っていくことを目指している。このことの実践が生徒自身の成長に結びつくものと信じている。

(3) 教育の4つの柱



図4 教育の4つの柱

学校に入学してくるウィークディコースの生徒の約9割が、選考書類の一つである作文のなかで、「学習がしたい」。そして「友達がほしい」というこの2点を記述している。これまで学習の機会を失われた分を取り戻したい気持ちと、良好な友達関係を築

きたいという思いで入学している。その思いに応えるべく、学校では、基礎学力を伸ばすために授業での創意・工夫を絶えず行っている。

知能検査による知的水準の変化に関しても、入学後に明らかな向上がみられた。このことは、学習の機会を十分に得られなかった過去に比べて、入学以降、基礎学習から取り組むことで学習が定着し、より取り組む意欲が向上していることが証明された。学習に取り組む意欲は、各検定試験や進学といった将来の具体的な進路にも関わっていると言える。

また、日々の学校生活を通して学習するソーシャルスキルトレーニングや自己をダンス、歌、そして工作などで表現するチャレンジワークなど同じ目標に向かって動く集団行動などは、日常生活と切り離して思考するのではなく、集団の共通の体験として認識され、学校生活のなかに溶け込んでいく。このことが生徒自身の発達を促す要因になっていると考えられる。

また、以上の4つの柱の延長線上には、生徒自らが考え行動して開催する、一年のうちでもっとも大きな行事である『星生祭』や総合研究及び美術活動、授業等で作り上げた作品を公開展示する『生徒美術作品展』等の行事を通じて、生徒達自らが楽しみ達成感を味わうことができる活動を通して、生徒達が本来持っている力を発揮できていると感ずることができている。

表3 星生祭来場者アンケート（自由記述より）

【平成24年度】

- ・親近感のあるとても感動的なものでした。
- ・歌 Smile&DVD とても良かったです。（中略）先生方の努力に感謝します。
- ・感動しました。涙ができました。
- ・全てに感動しました。ダンスが好きな人、創作が好きな人、個性を伸ばしてありました。トイレの掃除がとても行き届いていました。
- ・「皆頑張っています姿」を見て、「私も頑張ろうという力」をいただきました。
- ・皆が頑張っていて練習してきた姿が目には浮かぶようでした。とても楽しく見せていただきました。
- ・今年もすばらしい星生祭をありがとうございました。ここまで本当に子ども達がイキイキ輝いている姿にとっても心ひかれ感動させられました。先生方のご指導いつもありがとうございます。
- ・皆が協力していてあったかい一日でした。個々も

応対もよく頑張っていました。最後の先生達の歌、生徒の歌声が耳に残っていて涙が溢れました。ありがとうございます!!

- ・日頃の皆の笑顔が目浮かぶようです。
- ・生徒の皆さんの表情がイキイキしておられたのがとても印象的でした。先生方と生徒の皆さんが一体となった「星生祭」だったと思います。一人一人に活躍の場活動の場があることはすばらしいことだと思います。この日を迎えるまで、先生方の準備、企画等本当に大変だったと思います。(中略) 一人一人の気持ちを大切に生徒さん達とかかわっておられるなあということがよくわかりました。今日はありがとうございました。
- ・とても良い星生祭でした。手作り感が出ていて生徒の頑張りが見えるようでした。人と人とのつながりがある学校だと思います。
- ・先生方と生徒達で作上げたとても良い発表会でした。一人一人を大切にされているのがとてもよく伝わりました。
- ・とってもあたたかい星生祭でした。
- ・教育の本来の“あるべき姿”、“教育の根本”がこの学園で実感させられた思いでいっぱいでした。今の教育ではない姿が、大切な事がこの学園で行われていると感じ感動の涙を久しぶりに流したような気がします。“一人一人を大切に”という感じがし、“これこそが教育!!”、私が昔から思い感じていた教育。全てこの学園に凝集されているように思えました。必ずこの学園は発展し続け、知らぬ者はおらずというような学園として成長し続けていくように思えます。一人一人の“心を大切に”という教育の根幹を感じながら、充実な一日をすごさせていただきました。ありがとうございました!
- ・見ていてとても楽しそうでした。

【平成25年度】

- ・毎年発表は力が入ってます! 皆、頑張ってますね。
- ・今年も感動しました。
- ・皆さんの笑顔が素敵でした。
- ・皆が頑張っている姿がとても良かったです。
- ・感動しました。よかったです!!
- ・毎年ですが、後半は涙でした。よかったです。昨年よりもパワーアップした子どもの姿が見れました。
- ・歌どれもよかったです。ダンスも楽しそうでした。今年もキャリー見たかったです。
- ・皆さんの暖かさが伝わるような星生祭だったと思います。1年生へのビデオがすごく印象的でした。

- ・とても良かったです。子ども達が生き生きしていました。星生祭秘蔵 VTR ありがとうございます。
- ・とてもすばらしかったです。(中略) 人前で表現することにとっても勇気がいったと思うけれどもとても貴重な体験ができていると思えました。
- ・心あたたかな星生祭でした。
- ・生徒一人一人が生き生きしていました。活動の場を与えていただきありがとうございます。
- ・まだ中3なのですが、ここに行きたいと見に来ました。いろいろな思いがこみ上げてきて涙がとまりませんでした。
- ・とても面白かったです。催し物もたくさんあって楽しかったです。
- ・孫も元気になってつい涙が出ました。暖かい励ましありがとうございます。
- ・昨年中3の息子を持つ親として見学に来ました。今年是一年生の保護者として参加させて頂きました。息子の輝きを取り戻していただいた先生方、先輩方本当に星生学園を設立していただき感謝、感謝です。
- ・ダンスのパフォーマンスが良い印象だった。
- ・ダンス、歌共に楽しく日頃の成果が出ていて“よかった”。
- ・「Smile」毎年良い企画です。

表4 星生祭を終えて (生徒感想文より)

【平成25年度】 3年生

- ・今年の星生祭は、この3年間の中で一番楽しい星生祭で1番焦った星生祭でした。(中略) 最後の歌では色々こみ上げてきて泣きそうになりました。今まで皆で頑張ってきて最高の星生祭をつくりあげることができて本当に良かったです!
- ・最初から最後まで不安だらけでしたが 終わりよければすべて良し。メンバーの皆に感謝です。
- ・私はこの星生学園で過ごした3年弱の経験を出し切ったと感じます。執行部は昨年もなかなか会議は盛り上がっていましたが、今年の執行部はまた昨年とは一味違い、3年生と2年生は一年間一緒に学校生活を通したことにより信頼も深まり互いに意見を出し合ったり一緒に笑いあったりと、そして新しく入学してきた一年生の先輩としてしっかりと活動できたと思いますし、一年生も初めての星生祭に向けて初めてながらも先輩達の仕事を見て、自分なりの意見や手伝いなどを臨機応変に対応できていたと思います。(中略) そして、最後の星生祭だったので自分なりに盛り上げること

に専念しました。チャレンジワークの歌では昨年と違った演出をするため、ふりつけをつけたり映像を流したりといろいろなことに取り組みました。

(中略) 今まで練習したことや頑張ったことが報われて嬉しかったです。放課後の練習など、星生祭らしくて、とても充実していて楽しかったです。最後としての星生祭となりましたがとてもよかったですと思います。この学校に来ての経験がすべていかせたんじゃないかなと思います。

- ・星生祭前日は友達と遅くまで準備したり練習したりすごく印象に残っています。今年の星生祭を振り返るとすごく楽しかったです。終わった後のあのなんとも言えない感じは今後絶対忘れないと思います。最後の星生祭は私の思い出に永遠に残ると思います。
- ・私は7月1日からこの星生学園に転校してきました。なので今回が最初で最後のイベントばかりでした。ボウリング大会や修学旅行、そして星生祭です。正直私は、学校の規模として転校してくる前の学校よりはるかに小規模だったので大したことないのではと考えていました。しかし修学旅行前からチャレンジワークでは皆が協力しテキパキと動いていました。人数が他の高校よりはるかに少ないために一人一人の力を合わせる必要となっていて自分のチャレンジワークの発表と割り当てられた係りの活動があるので誰一人としてサボることなく準備に取り組んでいました。私は本番に参加することができませんでしたが後日にビデオを見せてもらい学校の一員として認められたような気がしてとても嬉しかったです。
- ・第2回星生祭の執行部をやれたことは僕の人生において重要なもので大きく成長でき、今後の人生において強い力になっていくと確信しています。また、皆と頑張ることの楽しさを再確認し、とても充実したものになりました。今年の最後の星生祭は自分の中で一番いいものになったと思います。何より盛り上がったしすべてを出し切ることができた祭りだったと思います。

生徒美術作品展 アンケート集計結果
 展示日程 平成25年3月5日～3月10日
 総来場者=238名(来場者受付簿チェック数)
 アンケート回収=121名
 アンケート回答率…約51%
 (図5参照)

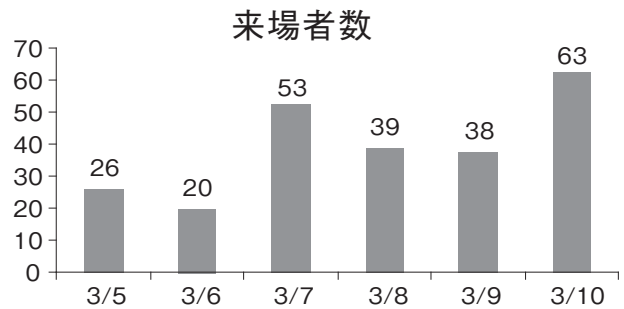


図5 来場者数のグラフ

1. 自由記述

- 楽しく作業している様子が目に浮かぶようでした。一生懸命さが伝わりました。アルバムの写真やメッセージにこころ洗われるようでした。
- がんばって、といたくなりました。どの作品も個性があり、みていて楽しくなりました。切り絵がよかった！
- 受付の生徒さんの穏やかな表情をみて温かく感じました。
- 細かく丁寧な作品が多く、感心しました。表現することの大切さを感じた。
- 学校の様子がわかりました。(写真集)
- 集中力に驚きました。
- 純真な心が出ている。
- 手作りの作品展という感じがした。
- とってもやさしく、温かい感じがしました。
- 生徒の生き生きとして表現に感動しました。
- 星生学園を好きな気持ちがたくさん伝わってきました。
- 絵のしたに、書いたときの気持ちを添えられていてよかった。
- ### 2. 佐賀星生学園に対してご質問、ご意見、ご希望
- 今回初めて学校内容を知りました。元気に前向きに進まれることを望むものです。
- 来年、案内状をいただければ必ず見に行きます。
- もっとPRしてもらえれば…
- 数年前に学園のことを知りました。
- 個人にあった教育をされていて子供たちがのびのびと自信を持って学園生活を送れていることが伝わってきました。
- また、このような展示が見てみたいです。
- どんどん発表の場を広げていってください。
- 別の場所でも実施してほしい。(公民館等で)
- 生徒に時間を十分かけているとおもいました。
- 不登校支援とあるが、生徒をみても違和感を感じな

かった。

学校のオープンスクールのときに是非行ってみたいです。

作品をどう作られたか、過程を作品としておいても面白いと思いました。

大切な場所だと思っているので、応援している。

こんな学校があることをうれしく思います。大いに役立っていくことを願います。

学園の紹介を同時にしてもっと多くの人に知ってもらいたい。

先生方のやさしさが生徒たちにそのまま伝わっている感じがした。

アンケートの保護者・生徒・学校関係者・その他の区分の仕方をすこし変えたほうがいいと思います。このような体験ができることは幸せだと思います。

5. 生徒の学校適応感

学校では、昨年度より石田（2009）によって開発された学校適応感のアンケートを毎年10月下旬、ウィークデイコースの全生徒に実施している。本尺度は、友人関係、学習関係、学校全体、教師関係の4因子（各4項目）から構成されている。各質問項目については、「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5件法で回答を求めている。

表5-1 学校適応感質問項目（石田，2009より）

1. この学校の友達といっしょにいると楽しい（友人）
2. この学校の授業はつまらないと思う（学習）
3. この学校の先生には安心して相談できると思う（教師）
4. この学校の生徒であることをほこりに思う（学校）
5. この学校の友達との関係に不満がある（友人）
6. この学校の授業を受けるのは楽しい（学習）
7. この学校の先生に対して親しみを感じる（教師）
8. この学校の生徒であることがうれしい（学校）
9. この学校にはよい友達がたくさんいると思う（友人）
10. この学校では一生懸命授業を受けたいと思う（学習）
11. この学校の先生に対して不満がある（教師）
12. この学校を離れるとしたらとてもつらいと思う（学校）
13. この学校の友達とは何でも話することができる（友人）
14. この学校の授業ではやる気がわいてくる（学習）
15. この学校では先生と気軽に話しができると思う（教師）
16. この学校の生徒であることを強く意識している（学校）

※以上表の（ ）内

友人：友人関係因子 学習：学習関係因子
学校：学校全体因子 教師：教師関係因子

表5-2 学校適応感の因子別平均値（学年別）

	友人関係	学習関係	学校関係	教師関係
1年	14.8	15.1	15.5	16.0
2年	14.4	14.1	14.9	15.5
3年	14.9	13.0	15.1	14.6

どの尺度においても学年別の差は少ないが、友達関係では75%程度が有効な関係を築いている。学習関係においては学年があがるほど平均値が下がっているため、3年生は学習に対して変化を望んでいると思われる。学校関係に対してはどの学年も75%、若しくはそれ以上の平均値を示しているため学校に対する帰属意識が高いものと思われる。教師関係についても大差はないが、1年生が一番高く学年が高くなると少しずつ向かいあう対象が変わることが窺われる。

6. 進路について

3年生の進路希望調査ウィークデイコースによると、大学、短大、専門学校を希望する生徒は20人でクラスの67%を占める。他、一般就労が5人、就労移行支援を含む就労継続支援を希望する生徒は5人である。

学校では、平成25年度3月第1期生を送り出す。ゆえに、進路結果を報告するのは来年度以降になる。

平成25年度卒業生進路希望調査
(希望先：進学から右の参照)

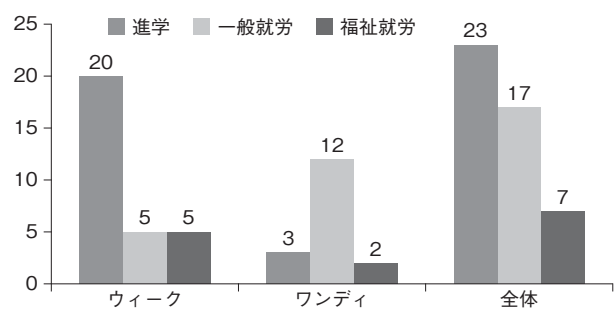


図6 平成25年度卒業生進路調査

7. 今後の課題

本報告では学校の教育方法をもとに様々な活動を経て、生徒達の学校適応感をまとめた。

今後の課題として、インフラ整備の面でも様々な問題はありますが、学校の4つの柱の基礎となる解決構築アプローチをより充実し、本格的に実践していく

ことが重要課題としてあげられる。このことが学校の真にめざす教育、「自らが主体となって得るもの」につながっていく。教師側は生徒達に変わってほしいと思っているが、単に服従してほしいと思っているわけではない。無理やりさせられる変化は最小の変化で、続く時間も短い。しかし、自分で変わりたい時は、長い時間そのことを持続することができる。ゆえに解決構築アプローチを充実させることこそが学校の教育の質を高め、生徒達が自分自身の成功に対する自尊心を向上させることに貢献できるものと確信している。

- ・参考資料1 『星生祭』記載新聞記事
佐賀新聞2013（平成25）年11月7日

(第三種郵便物認可)

佐賀新聞

星生学園で文化祭

10日開催 全学年そろい初



全体の企画や運営などを取り組む執行部のメンバー。佐賀市多布地の星生学園

佐賀市 不登校や発達障害がある生徒の受け皿となっている高等専修学校「佐賀星生学園」が10日前11時から、同校で開催される。開校3年目で全学年が揃った初の文化祭。歌やダンス、制作展など多彩な催しを繰り広げ、それぞれの境遇を理解し合いながら活動してきた成果を披露する。

「成長した姿見て」

生徒数は1年目の50人から現在は104人に倍増した。生徒の増加に伴い、コンビニやパザの出入りも増え、体験教室などのイベントも充実してきた。メインの発表では、ハンドベルやダンスを披露、木工製品を展示する。

執行部長の宮原雄平さん18は、3年連続で執行部を務める。保健室長やフリースクールに通った経験を持ち、自分にとって、星生祭は学校に居る理由の一つ。部長として全体を見るのは大変だけど、みんなの頑張りやいろいろなイベントにしたいと意気込む。

副部長の横尾秀和さん18は中学時代からのこもりを経験し、父親の勧めで昨年4月に転じた。「星生祭は自分たちの活動を外部に発表できる唯一の機会。半年前から練習に取り組んだ成果をたくさんの人に「見てほしい」と呼び掛ける。

加藤雅世子校長は「生徒全員に役割があり、みんなで作上げる文化祭。生徒たちが成長した姿を見てほしい」と話す。(久保慎一)

- ・参考資料2 『生徒美術作品展』
記載新聞記事 佐賀新聞2013
（平成25）年3月7日

ありのまま自分らしく



ちぎり絵や切り絵、スケッチなど約150点が並ぶ佐賀市立図書館の生徒美術作品展。佐賀星生学園の佐賀市立図書館

佐賀市 不登校や発達障害のある生徒を受け入れている佐賀市の高等専修学校「佐賀星生学園」(加藤雅世子校長)の作品展が、10日まで、同市立図書館で開催されている。ちぎり絵やスケッチなど約150点の生徒の自己表現が並び、表現力や技術力が並んでいる。

佐賀市 同校は不登校経験を持つ生徒は多い。高学年まで転校生を受け入れてきた。対人関係など社会性を育てることに重点を置き、美術や音楽を伸ばす授業を展開。その成果を紹介しよう。初めて作品展を企画した。

生徒役人が切り絵やスケッチ、ちぎり絵、写真など幅広いジャンルの作品約150点を並べた。中学時代に不登校だった1年生の瀬戸進吾君16は、夏の花を題材にしたちぎり絵3カ月が制作。色紙を細かくちぎり細部まで精緻に表現した。「花びらの部分は何度も直した。入念に比べ、大胆に絵を得るようになった」と話す。

社頭生さん16も不登校の経験があり前向きに学校生活を送ってきた。つらかったら、好きな絵を描けるようになった。今回はみんなの絵に自分も個性を表現して取りたい。学園生活で大切な経験や日常を伝えたい。美術や音楽を伸ばす授業は、写真とちぎり絵。進歩もみんながみんなに受けていた。「つまみせん」が口癖だった。過去の自分を誇りに表現。「逃げ出したがりだったの場所、優しくの顔が分かんなくなるとの言葉は日々、本当に幸せでした」と卒業までの思いをつづった。

指導する美術教師の島田さんは「自己表現が早いな生徒多いが、作品には思いもたぬ視点や色使いで、個性や才能を見せられた」と成長を喜ぶ。(藤生雄一)

佐賀星生学園が初作品展

ちぎり絵やスケッチ150点

市立図書館